

## 「戦艦大和」雑感

国立病院機構鈴鹿病院長

小長谷正明

中学に入ったばかりの時だったと思う、父が僕に、表紙になにやら漫画のようなイラストがいっぱいのソフトカバーを渡して、この本を読んでみろといった。文庫本などの小説はこどもに有害だと口にしていた人なので、珍しいことだった。そして著者のお父さんは、大和で戦死した海軍士官だったと、つけくわえた。父も海軍士官だったので、そのあたりにアフィニティがあるのかと思い、読み始めた。『まあちゃんこんにちわーハイティーンの見たアメリカ』（山本祐義、文芸春秋、昭和36年）、ベストセラーである。まだ、終戦後といってもいい昭和三十年代早々、アメリカのコネティカット州の全寮制のハイスクールに留学した高校生が、お母さんに書いた手紙の本であった。貨物船に便乗して太平洋を渡り、文字通りのカルチャーショックを受けながらのスクール・ライフを綴っている。いかにも育ちのよい、さわやかな筆の運びであり、毎回の「まあちゃんこんにちわ」の書き出しも好ましかった。表紙の漫画はその彼を同級生が描いたものらしい。読んでいるこちらとしても、まさに異次元の世界であり、かの国に漠然としたあこがれがわいたものだ。そのようなチャンスを求めなければ……。父は視野を広めてやろう、勉強の励みになればと思ってその本を買ってきてくれたものらしい。もっとも、敗軍の将兵の常で日々の生活に追われ、わが家では著者のような留学は考えるべくもなかった。本の始めのほうに写真のページがあった。品のいい祖父母と若く見えるお母さん、つまりまあちゃんと、著者とその兄の家族写真があり、そして、戦死した父親の端正な軍服の姿が印刷されていた。キャプションで、沖縄特攻で大和と運命をともにした第二艦隊先任参謀、山本祐二大佐と知れた。それも、僕には驚きであった。もちろん、それまでにも大和のことは知っていた。プラモデルや写真でおなじみであり、艦形や性能の要目などは細かいことまで覚えていたくらいだ。他のタイプの戦艦などよりは近代的でスマートなシルエットであり、いかにも堂々として強そうで、仲間同士で模型の出来ばえや、軍艦にまつわるトリビアを競い合っていた。この世界最大の戦艦の悲劇的な最期も知識として知ってはいた。しかし僕は昭和24年生まれ、パールハーバーもB29も原爆も大和もすべて話の中だけ、戦争のことはすべて昔あったことだった。だから、この本で初めて大和で戦死した個人の写真をみ、その家族が陰りのない生き生きとした文章でこちらの心を啓発していたことから、大和はお話ではなく現実だったと、愚かにも気がついた。平成18年元旦、娘と家人に誘われて、久しぶりに映画館にいった。『男たちの大和』だ。制作開始や大和の実物大セットが話題になっていたのも、前々から気は引かれていたが、きっと目が潤んでしまうだろうからと、自分では正月のスケジュールに入れていなかったのだが……。映画の中でも戦艦大和は大きくてスマートで、格好よかった。その大和に日本の旗色が悪くなった昭和1

9年春、幼い少年水兵たちが配属された。お皿のような水兵帽の彼らのキビキビした動作に、そういえば自分も小さい頃に同じような帽子で整列したり、手旗信号で通信し、尻の皮の痛みを耐えながらカッター（短艇：大型ボート）を漕いだことを思い出した。この子には規律が必要と、海洋少年団に入れられたのだ。少年兵たちそれぞれは、豊かでも平穩でもない生活や家族を背後に控えさせながらも、もくもくと訓練に励み、中村獅童らが扮する下士官に鍛えられながら育っていく。厳しい訓練に明け暮れているうちにレイテ沖海戦となった。主役たちは対空機銃の兵員であり、それまで彼らが想像だにしなかったような激しい戦闘を行うことになる。海戦の前、フィリピンの海を僚艦と並んで、白い航跡をひきながら航走する巨大な大和を空から見下ろしているシーンで、とうとう画面がにじみ始め、目が熱くなってきた。暗い映画館の中なので、誰にみられる虞れもなかったので、涙腺がはたらくがままにしておいた。現在と時代の価値観はちがうが、純真さと義務感で淡々と職責を励んでいるうちに、彼らの赤く染まって散っていく姿を予想して、感極まってきたのだ。そのレイテ海戦からも31年経った昭和50年に、父と一緒に恩師の名古屋大学第一内科の祖父江逸郎教授のお宅にうかがった。お仲人のお願いがすむと、海軍方面の話となった。先生は昭和18年に名古屋帝国大学卒業後、海軍の軍医となり戦艦大和に配属されたことを話された。レイテ海戦に参加され、まさに血だらけの修羅場の話がされていた。広いスペースのある水兵の食堂を応急の救護室とし、運び込まれた負傷兵の手当てをしたこと、手当ては治る見込みのある兵を優先したこと。防弾の盾などがなく、むき出しのまま敵の飛行機に迎撃していた機銃班の兵員に損耗が激しかったこと、敵の戦闘機が機銃座を狙ってきたこともあるが、自分の機銃が撃って焼けた葉が当たって火傷を負った兵が少なからずいたこと、などを語られた。応急の救護室は巨大な戦艦の艦内にあつたので、外の様子はまったく分からず、時々感じた衝撃も、自分の艦の主砲の砲撃か、敵の爆弾の命中かは、わからなかった。戦闘が終わって甲板にでると、先程まで一緒に行動していた戦艦武蔵や利根などの巡洋艦の姿がなくなっており、寂しくなっていたという。その後、祖父江先生は昭和20年の春に江田島の海軍兵学校に転勤となり、そこで原爆の閃光をみて終戦を迎え、戦後は、外地の兵を迎えに行く復員船の船医を勤めてから母校に戻られた。復員船時代、米軍から渡された点滴セットに驚き、ついで補液の効果にさらに目を見張られ、負けるべくして負けたことを実感された。先生はこのような戦争中の話を医局員の前でされることはほとんどなく、次にうかがったのは30年近くも後、愛知医科大学学長などの公職をとうにリタイアされた後の同窓会の席だった。挨拶を終えてお宅を辞した後、父はボソッとつぶやいた。「あの軍医大尉の先生は死線の上をまたいでいたのだな」映画の中でもレイテ海戦は凄まじい戦いだった。中村獅童らの機銃班員は激しく機銃座を旋回させながら射撃を繰り返し、少年兵は必死になって弾薬を補給し続ける。米軍機は弾幕をくぐって接近しては機銃掃射を行い、たちまちにして機銃の周辺は阿鼻叫喚の巷と化して血しぶきが飛ぶ。そしてその連続だ。だから、たまにこちらの弾が命中して米軍機が煙を噴くと、ついやったあと心の中で喝采するが、あまりにも一方的

な戦闘で空しくなってしまう。下士官の中村獅童も掃射を浴びて負傷し、応急救護所に運び込まれる。が、軍医は診ようとしないう。戦友はなぜ診ないのだと咎め、軍医はぶっきらぼうに目を診察する。トリアージだ。そして、素っ気なく言った。「治って、また戦える兵を治療するのだ」 31年前にうかがった話をまさにリプレーするシーンであり、戦場のリアリズムそのものだった。その後、日本艦隊の有意な作戦行動はなく、大和も空しく呉軍港に舫っていたが、折からの沖縄戦に水上特攻として出撃することになった。米軍の上陸地点近くに乗り上げ、その巨砲を撃ちまくるというアイデアで、燃料は片道分、飛行機の援護なしというものであった。命令伝達に対し、大和の属する第二艦隊司令部は抵抗し、山本祐二前任参謀の手荒い抗議も史実として記録されている。が、自分も反対であった伊藤整一第二艦隊司令長官は結局、連合艦隊命令に従った。最後のの上陸をさまざまに思いで過ごした水兵たちを乗せて出撃した大和は、すぐに米軍機の攻撃に晒された。再び、レイテ海戦の時と同じように、機銃座の周りでは銃弾と血の旋風が起り、密かに復帰していた中村獅童下士官らは必死に撃ちまくる。奮迅空しく、米軍機の激しい攻撃で前回以上のワンサイド・ゲームであり、撃たれてのけ反る水兵に比べて、こちらにやられて火を吹く敵機はまれで歯がゆい。おびたしい味方の損耗だった。映画の撮影で使った血糊は400リットルに及んだという。 ついに大和は沈んだ。史実としては、さらに一隻の巡洋艦と4隻の駆逐艦も沈み、3721名が戦死した。これに対し米軍機の損害は6機で、戦死者は14名だけであった。映画の中で描かれる水兵たちは、それなりに誠実な人生を送り、訓練に励み、極限の中で任務を全うしようとしていた。おそらく現実もそうだったのであろう。すでに僕の涙腺は働きを止めていたが、黯然とした気分で映画館を後にした。 まだ子どもの頃に父に戦艦大和をみたことがあるかと聞いた。「飛行機の上から見たが手荒く大きな軍艦だった、ほかの戦艦より二周りも三周りも大きかった」と答えてくれた。「へえすげえな」と、僕は単純に目を輝かせて聞いたことを覚えている。ちなみに、手荒くとは非常にを意味する軍隊用語だったらしく、加賀乙彦の終戦時の陸軍幼年学校を描いた『帰らざる夏』の中でも使われている。しかし、大人になって父に大和のことを聞くと、幾分不快そうな口調で言った。「陸軍の玉砕と海軍航空隊の特攻ばかりなので、水上部隊もということでしたんだろうが、無謀な作戦だった。将兵の無駄遣いだ。当時は俺も若くて散り行く桜、有終の美と思っていたが、あの判断は海軍上層部がおかしかったのだ。無意味な負けるに決まっている戦をしてはいけない。吉田満という少尉の『戦艦大和の最期』という本を読んだが、攻撃を受けた大和が傾きかけたら、バランスを戻すために副長が機関室に注水を命じている。機関科の兵士が何百人も働いている最中に無警告で注水だ。もう、どうせ船が助からない状況はわかっていたはずだ。こんな殺生なことをする馬鹿がいた。しかも、その副長は助かって生き残っている。・・・」 父は同期生の3分の一が戦死する中を生き残り、海軍少佐第三航空艦隊参謀という肩書きで終戦を迎えた。華々しい戦歴などはほとんどなく、昭和20年8月の混乱期に降伏軍使のマニラ派遣の準備や厚木基地の反乱鎮圧し、そして飛行機で進駐してきた米軍を最初に敬礼して迎

えた士官になったなどと、終戦業務で多少は歴史に参加した。海軍士官のキャリアの最期としてはいささか忸怩たるものだったかもしれない。戦争中の見聞の上に、戦後零細企業を経営して苦勞したこともあったのだろう、酒を飲むと問わず語りによく次のようなことを口にしていた。「指揮官の孤独というものがある。軍隊ならば、個々の将兵の生死にかかわる判断をする場面がある。部下の参謀がいろいろと計画を練っても、決断するのは指揮官だ。鬱々として黙っている姿をよくみた。企業や組織のトップでも同じ。右か左かの判断を間違えば倒産し、従業員とその家族の運命に関わることになる。そこをよく考えて決めなければいけない。功名心で部下を犠牲にするなどはもっての外で、一将功なりて万骨枯れるなどと言われちゃいけない」「軍艦が沈められるたびに艦長も船と運命をともにさせたので、優秀な人が皆いなくなってしまった。軍艦は2、3年で造れるが、艦長は2、30年かかる。人材は大事にするんだよ」今、僕が預かっているのは、戦艦とはほど遠い駆逐艦のような小さな国立病院である。しかし、平穩な航海ではない、時折戦々恐々のマネジメントをしなければならない。人材を大事にしなければいけないとやってる。希ながらも指揮官の孤独を感じる時もある。